「資本論を読む会」便り

2024.10.16　No. 91

9月は、次の箇所を読みました。
第Ⅰ部: 第1篇 第1章 商品 第1節 商品の二つの要因　　(残り全部)
第Ⅱ部: 第3篇 第12章 第1節 マニュファクチュアの二重の起源　(最後まで)

※　本文・報告・検討事項などの要点を簡単に紹介します。段落は、大月書店の全集版の本文の字下げと傍注の付け方で区切っていますが、原則どおりでないこともあります。段落番号の後の小さい字は、(原著ページ番号)と段落の出だしなどです。

第92回
第Ⅰ部　第1篇 第1章 商品　第1節 商品の二つの要因

前回読んだ箇所に対するいくつかの質問について、レポーターから説明がありました。
1)「資本主義的……商品の分析から始まる。」とあるが、マルクスは「資本論」以前にこの説明をしているのか。それとも、これからその説明をするから「以降を読め」と言っているのか。という質問について。
これは「以降を読め」と言う意味です。実際、そういう展開になっています。なお「資本論」の約10年前に「経済学批判」で商品の分析を行なっていますが、「資本論」を読む前にそれを読め、と言っているわけではありません(読めば参考になります) 。

2)「富の基本形態として…」とあるが、例外的なものに何があるか。との質問について。
「富は巨大な商品の集まり」ですから、「富の基本形態」とは「一つ一つの商品」です。この「基本形態」という語ですが、「成素形態」「要素形態」という訳もあるけれど、「要素」と言えば分かりやすいと思います。
富とは、人間が生活する上で必要な物のうち人間の労働生産物を言います。資本主義社会ではほとんどすべての労働生産物が商品となっていますから、その例外を挙げるとすれば、商品ではない富、例えば、農家が自家用に栽培する米や野菜などがそうでしょう。

3)「捨象」とあるが、何を基準に捨象しているという説明はどこにあるのか。異なった観点で捨象・抽象すると結論が違うのではないか。という質問について。
商品が交換されるということは、質的にも量的にも等しいものが、二つの商品に存在していることを意味しています。使用価値は交換される二つの商品で異なりますから、今研究しようとしている、商品に共通なもの、ではありません。この基準によって、使用価値を捨象しています。

第9段落　(51)「この共通なものは、商品の幾何学的とか物理学的とか…」　～　注(8)
～第11段落　(52)「そこで商品体の使用価値を問題にしないことにすれば、…」
(各段落の要点は前号に掲載)

前回はこの辺で時間切れとなりましたので、今回はここからです。冒頭のレポーターの説明 3) も、商品の使用価値の捨象に関することでした。
商品の使用価値が捨象されるので、商品を生産する労働についても、何を作ったか・どんな作業をしたか(具体的有用労働)といったことが捨象され、ただ商品を生産した・労働した

(抽象的人間労働)ということだけが残ります。

第12段落　(52)「そこで今度はこれらの労働生産物に残っている…」　～

●使用価値を捨象した後の労働生産物に残っているものは、抽象的人間労働力の支出の、単なる凝固物。この凝固物が表しているのは、生産に人間労働力が支出され、人間労働が堆積されているということだけである。

●これらの凝固物に共通な社会的実体の結晶として、これらの物は価値－商品価値である。

いま研究対象としている商品は、いつの時代の商品か、という疑問が出されました。基本的には資本主義の時代ですが、分析結果は古代の商品にも通用します。

次に貨幣の役割が話題になりました。貨幣は商品交換を媒介していますが、その結果、商品が交換されているということが本質的です。ここでは貨幣は黒衣(くろご)扱いです。なお、第2章で、貨幣は商品の発展した形態であることが明らかにされます。

第13段落　(53)「諸商品の交換関係そのもののなかでは、商品の…」　～

●商品の交換関係の中では、商品の交換価値は、その使用価値とは関係ないことが分かった。そこで、労働生産物の使用価値を捨象すれば、いま規定した労働生産物の価値が得られる。商品の交換関係 or 交換価値のうちに現れる共通物とは、商品の価値である。

●研究の進行は、価値の必然的な表現様式または現象形態としての交換価値へと続くが、当面は価値の形態に関わりなく価値そのものを考察する。

第14段落　(53)「だから、ある使用価値または財貨が価値をもつのは、…」　～

●商品の価値の大きさは、商品に含まれている「価値を形成する実体」即ち労働の量によって測られる。労働の量は労働時間によって測られる。

この労働は抽象的人間労働です。この労働の量が労働時間で測られることについて、以下で説明されます。

第15段落　(53)「一商品の価値がその生産中に支出される労働の量によって…」　～

●価値の実体をなす労働は同じ人間労働であり、同じ人間労働力の支出と見なされている。
　したがって、同じ分量の商品を作るのに、時間を要する労働も要さない労働も同一の労働と見なされ、それらの商品の価値は等しい。

●社会的に必要な労働時間とは、現存の社会的に標準的な労生産条件と、労働の熟練および強度の社会的平均度とをもって、何らかの使用価値を生産するのに必要な労働時間である。
　つまり時間を要する労働も要さない労働も平均的労働時間を要したと見なされる。

●商品を生産するための社会的に必要な労働時間は、生産力の変化によって変化する。
　例えば、蒸気織機によって同じ分量の織物が従来の半分の労働時間で生産されるようになると、織物の価値は従来の半分になる。

ここでは、価値の大きさ、労働の熟練度、社会的平均労働力、社会的平均労働時間、などの関係が説明されています。

第16段落　(54)「だから、ある使用価値の価値量を規定するものは、…」　～　注(11)

●使用価値(商品)の価値量は、その生産に社会的に必要な労働時間によって規定される。社会

的に必要な労働の量とは、使用価値を生産するために必用な社会的労働時間である。
　個々の商品は、一般に、その商品種類の平均見本とみなされる。故に、等しい労働時間で生産される商品は、等しい価値量を持つ。
　各商品の価値の比は、一方の商品の生産に必要な労働時間と他方の商品の生産に必要な労働時間との比に等しい。
　価値としては全ての商品は一定の大きさの凝固した労働時間でしかない。

第17段落　(54)「それゆえ、もしもある商品の生産に必要な労働時間が…」　～

●生産に必用な労働時間が不変であれば、価値の大きさも不変である。
●生産に必要な労働時間は労働の生産力に変動があれば変動する。
●生産力を変化させる要因として、労働者の熟練の平均度、科学とその技術的応用可能性とその発展段階、生産過程の社会的結合、生産手段の規模および作用能力、さらに自然事情などが挙げられる。
●一般に、商品の価値は、その商品を生産する労働の生産力に反比例して変動する。

本文にダイヤモンドの総産出高と農産物の価格を比較する話が出てきますが、分かりにくいです。ダイヤモンドは多くの労働時間が必要だから価値が大きい、ということでしょうか。

第18段落　(55)「ある物は、価値ではなくても、使用価値であることが…」　～　注(11a)

●労働生産物が商品となるための条件。
　・他人のための使用価値、社会的使用価値を生産しなければならない。
　・生産物は、他人の手に交換によって移されなければならない。

生産が機械化・自動化されていくと価値はどうなるか、資本と機械装置の役割などの議論がありました。

第Ⅱ部　第3篇　第12章　分業とマニュファクチュア
第1節　マニュファクチュアの二重の起源

第1段落　(356)「分業にもとづく協業は、マニュファクチュアにおいて…」　～

●「分業にもとづく協業」とは、同じまたは関連のあるいくつかの生産過程で多くの人々が計画的にいっしょに協力して労働すること。それぞれの労働は多数の労働に細分化され、労働者はそれらの労働に縛りつけられる。
●資本主義は、マニュファクチュアから始まったが(16世紀半ば～18世紀最後の三分の一期)、工場(作業場)での作業は依然として手工業的なものにとどまっていた。

この12章も「相対的剰余価値のいろいろな特殊な生産方法」(第10章) を扱っています。

第2段落　(356)「マニュファクチュアは二重の仕方で発生する。一方では、…」　～　注(26)

●中世の手工業からマニュファクチュアが発生してくる過程には二つのケースがある。
●第一。一つの生産物が完成するまでに様々な手工業者の手を通らなければならない場合。
　以前は様々な手工業者が独立して担っていたが、手工業者を一つの作場に集めて、一人の資本家の指揮のもとにそれらの手工業が結合されて行われる。
　一つの生産物が完成されるまでにその手を通らなければならないいろいろな種類の独立

手工業の労働者たちが、同じ資本家の指揮のもとにある一つの作業場に結合される。それともに、独立の手工業者が次第に特定の物を生産する部分労働者になる。

本文には、例として馬車の製造が詳しく取り上げられています。

第3段落 (357)「しかし、マニュファクチュアはこれとは反対の道でも発生する。…」 ～

●第二。同じ商品を生産している手工業者を協業させる場合。

同じまたは同じ種類の作業を行なう手工業者を、一人の資本家が同時に同じ作業場で働かせる。

効率改善の必要から、一人の作業を分割し、分割した作業を別々の協業者に同時に行わせる。各人が分担された単純な作業を同時に行うことにより、一つの商品を生産する。

分割は改善され、組織的な分業になっていく。

本文では、製紙マニュファクチュア、製針マニュファクチュアなど、いくつかの歴史的な例が挙げられています。

第4段落 (358)「このように、マニュファクチュアの発生様式、手工業からの…」 ～

●マニュファクチュアの、手工業からの生成には、二つのケースがあった。

(1) いろいろな種類の独立した手工業者を一つの作業場に集めることから出発。それらの手工業者は一つの商品を生産する生産過程の互いに補足し合う一面化された部分作業を専門的に担うようになる。

(2) 同じ種類の手工業者たちが集められ、同じ商品を協同して生産することから出発。効率改善の必要から、個別の手工業を分解して独立化させ、それぞれを部分労働者に割り振りして専門的に分担させて生産する。

●出発点は異なるが最終の姿は同じで、人間をその器官とする一つの生産機構である。

第5段落 (358)「マニュファクチュアにおける分業を正しく理解するためには、…」 ～ (最後)

マニュファクチュアにおける分業を正しく理解するためのポイント。

●第一に、生産過程をその特殊な段階に分解することは、この場合、一つの手工業的活動をそのいろいろな部分作業に分解することと一致する。

複合的であろうと単純であろうと、作業は相変わらず手工業的であり、したがって、個別労働者が彼の用具を操作するにあたっての力や熟練や速さや確かさにかかっている。

相変わらず手工業が基礎である。

●手工業という狭い技術的基礎は、生産過程の真に科学的な分解を排除する。

生産物の通るそれぞれの部分過程が、手工業的な部分労働として行なわれうるものでなければならないからである。

●相変わらず手工業的な熟練が生産過程の基礎であるから、どの労働者もただ一つの部分機能だけに適合させられ、彼の労働力は一生涯この部分機能を担う器官にされてしまう。

●マニュファクチュア的分業は協業の一つの特殊な種類であり、その利点の多くは協業の一般的な本質から生ずるのであり、協業のこの特殊な形態から生ずるのではない。

マニュファクチュア的分業は、生産過程の科学的な分解を排除するという点が、一つの特徴となっているようです。生産過程の効率的分解と組立ては重要です。